
とある冒険者の日記

勇者ルースの自堕落冒険譚

瑠璃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある冒険者の日記 勇者ルースの自墮落冒険譚

【Zコード】

Z5303B

【作者名】

瑠璃

【あらすじ】

女好きでギャンブル好きの最悪勇者ルースと、そんなルースと敵対する菜食主義者で昼寝好きのへんな魔王ゾルネウスのお話です。

ねむかこ（前書き）

久々に小説を書いてみます！

俺の名前はルース。

25歳、男。趣味は女遊びとギャンブルだ。ま、そんな感じだが、俺は一応、世界征服を企む悪しき存在だが、菜食主義者で昼寝好きのヘンなヤツこと魔王ゾルネウスを倒す宿命を背負う勇者でもあるわけだ。

が、しかしだ。世間様は、そんな俺が死んだと思い込んでやがる。

どうも命と引き換えとゾルネウスのヤツを斃したって噂が巷で流れちまつていよいだ。

おいおい、俺はまだ死んじゃいねえつーのツツー！

ふう、なんて言つたか……ゾルネウスの野郎を討伐する使命を背負いながらも、立ち寄つた町々でナンパやギャンブル三昧のぐーたら人生を送つちまつてるせいもあるから仕方ないかな……。

さてと、それはともかくだ。

珍しくゾルネウスの野郎から攻撃を仕掛けで来やがつた！ しかも仲間を連れて不意打ちに近いかたちで

ンで、なにを思ったのかは知りたくないが、ゾルネウスの野郎に俺は、なんと性別を変えられてしまう！

つ・ま・りだ、俺は女になつちまつたんだよ！

あああああ、なんてことだ！ 婚約者もいるつていうの！

な、なんてことしてくれたんだあああ！

そんなこんなで悩む俺 勇者ルースの旅は始まる！

序章 魔王は急げ者（前書き）

あとで修正等をされるかもしけませんがよろしくお願いします

序章 魔王は急け者

序章 魔王は急け者

「ふああああ、くそ眠いお……」

魔王とは魔族と呼ばれる連中の頂点に立つ存在だ。

しかし、ゾルネウスという名の魔王に関しては、そんな魔族の頂点に立つ禍々しい瘴気を身にまとう邪悪の権化である魔王という威厳などはまったく感じられないだろう。

急け者、面倒くさがり屋、他力本願……つと、こんなダメ人間を彷彿させる言葉が、殊の外、よく似合つ存在であるだけに

魔城ヴィルドガル 魔王ゾルネウスの住まいであり、数多の魔族どもが巢食う万魔殿。

さて、その深奥には主であるゾルネウスの玉座が存在するのだが、そこは広大な空間にど真ん中に布団が敷いてある以外、特になにも見受けられない殺風景そのものである。

当然、広大な空間つてわりに殺風景な空間のど真ん中に敷いてある布団の上には、ここ魔城、ヴィルドガルの主である魔王ゾルネウスが横たわっている。

「ゾルネウス様！ 何故、アイツ殺さなかつたのです！ アイツは我々魔族を殲滅すべくこの世に生を受けし神々の使いっぽい存在ではありませんかツツ……！」

ダメ人間……いやいや、ダメ魔王とはいえ、当然、ゾルネウスには数多くの配下が存在する。で、そのうちのひとりであるフォルネスという魔族が意を決し、そんな質問を布団の上に横たわって今にも眠りこけそうな感じがする激しい眠気に襲われ大あくびをしてい

るゾルネウスに対し、問いかけるのだった。

ちなみに魔王ゾルネウスの容姿は、赤い一ツの白い珠についた
ナイチャップ^{ナイチャップ}パジャマ^{パジャマ}就寝帽と寝間着を着た女……いや、女の子と言つた感じの幼い少女の姿をしている。魔王と呼ばれる存在らしからぬ姿だ！

それはともかく。

「ん、ああ、アイツを何故、殺さなかつたかつて！？　ん……そ
うだなあ面倒くさかつたからつてところかな」

「エエエエッ！？　め、面倒くさかつた￥つて……」

「うんうん」

ゾルネウスのその言葉を聞いたフォルネスは啞然とする。まあ、
そうだろ？。魔王という存在らしからぬ言葉なだけに
「ま、どうせ生かしてやつた恩も忘れて、また挑んでくるだろ？ね。
そん時は　」

ゾルネウスがそんな言葉を言った次の瞬間、フォルネスは激しい
殺氣と悪寒に襲われるがビクビクと身を震わせるが、

「後は頼むわ……ぐおー、があー、ぐががー……」

刹那の一瞬で睡眠状態に入るゾルネウスに対し、啞然とするのだった。

「やれやれ、先が思いやられる。さて、勇者のヤツをどうしてくれ
ようか……」

と溜息をもらつずフォルネウスは、とりあえず策謀を練るのだった。勇者討伐という策謀を

第一話「やる気のない原者」その一（漫畫セ）

短めですか、第一話その一をヒヤしますねw

第1話「やる気のない勇者」その1

第1話「やる気のない勇者」

その町へと来れば、どんなものでも手に入る。

どこの誰がそんなことを最初に言い始めたかは知らんけど、俺が住んでる町 ブルーノワール大陸という名のこの広大な大地のほぼ7割を支配下に治めているオルゴニア帝国の首都ドリームヒルドの衛星都市クイッサムの様子を一言で表現するなら年中無休のフリーマーケットが開催している町つてところだろつか？

人跡未踏の地へと挑み珍獸希少動物を捕らえてきた者、自身が製造した自慢の刀剣類、薬品、装飾品を売りに出張ってきた者などなどの様々な商人たちの思惑が交錯している一方で、要人の暗殺依頼を目的とした者共が集まる暗殺者アサシンキルト組合や遺跡荒らしを生業とした連中が持ち込む金銀財宝が出回る裏フリーマーケットがあつたりと、この町の陰で蠢く裏社会の連中も多い。

また、オルゴニア帝国の現皇帝で、そんなオルゴニア帝国初の女帝であり、先帝の遺児、三人の姫君のひとりでもあるアールマティが悪法として撤廃したはずの奴隸法が未だに生きているらしく奴隸商人と思われる連中が数多く裏社会の連中とともに蠢いているつて噂もよく聞く話だ。

とまあ、こんな町を根城にしているのが、この俺つてワケだ。ああ、俺の名前はルース。年は25歳で性別は女……つて言つても数日前までは男だつたわけだが、色々あつて性別がんで、特技は酒をいくら飲んでも酔わないってところかな……つと、自慢できるような特技じゃないな、こりや。

さあて、こんな俺は一時期、勇者なんて呼ばれていたこともある存在だ。が、今じゃギャンブル三昧な日々を送るダメ人間と化して

いる。

「今日も俺は綺麗だなあ……」

ダメ人間って感じで、どうも最近、俺は自己陶酔者と化してしまっている。ふふ、そんなこんなで鏡に映った自分の姿をじっと眺める癖がついちゃったよ。

ま、それはともかくだ。

「あああ、面倒くせえ……」

そんな言葉から俺の自堕落な一日は始まる

第一話「やる気のなご頼者」その2（漫畫）

その2のコラボかー！

次回のネタはどんなんかにしようや

第1話「やる気のない勇者」その2

第1話「やる気の無い勇者」その2

オルゴニア帝国の首都ドリームヒルドの衛星都市であるクイツサムには、エルフやドワーフなどの寿命が数百年、はたまた数千年なんて言われる連中も数多く住んでいる。

一昔前なら、人間以外の種族を異端視する運動やらが多々あり、差別の対象として見られがちであつたが、オルゴニア帝国の現皇帝であり、そんなオルゴニア帝国初の女帝であるアールマティが、

「人間以外の種族にも、我が国の国籍を与えよう。ついでに、そのことに反対する者は決して赦すわけにはいかない！」

なんて公に言つたものだから、一昔前までは人里離れた幽山幽谷、人跡未踏の地が数多く残つているような辺境の地などへと赴かないと見かけることがなかつたエルフやドワーフも、今じゃクイツサムの街はおろか、オルゴニア帝国の領土内に存在する街と呼べるような場所へ出張ると必ず見かける「ぐくぐく一般的な種族と化してしまつて」いる。

んで、最近じゃ夢魔のサキュバスような魔族もうるついている。

魔族だからつて別に悪さをしなきゃいいんじやねえの？ と思つてる者も多いことだしな。俺もまったく気にしてはない。ま、それはともかく。

「うう～む……」

今、俺はジツと目の前の大鏡に映つている自分の姿の対して睨みを利かせている最中だ。

「綺麗だな、俺……。でも、なんかイヤだな……」

ありていに説明すると、目の前の大鏡には長い黒髪を頭の後ろでポニーテール状へと束ねている容姿端麗、才色兼備な背の高い若い女の姿が映り込んでいる。俺だよ、俺 ルース様だよ！

さてと、俺が今いる場所は酒場＞ステイツキーズく。ルーナという偽名で働かせもらつてるそんな場所だ。

「おーい、まだ寝てるのか！」

と、そんな声が聞こえてくる。酒場＞ステイツキーズくの店主であるオスワンさんだ。

「起きてますよ、すでに」

とりあえず、そう返事を返す俺は、今いる酒場＞ステイツキーズくの2階にある私室を後にしたのだつた。

酒場＞ステイツキーズくは冒険者を自称する連中に連日連夜ワイワイガヤガヤと賑わい盛り上がつていて。

クイツサムの街を拠点にブルーノワール大陸東方の人跡未踏の秘境へと挑む連中が後を絶たないつて理由もあり、そんな連中がこぞつてやつて来る場所のひとつが、ここ酒場＞ステイツキーズくである。

ああ、ついでにだが

「この店の女店員の衣装は巷で人気らしいな」

客のひとりがうつとりとした表情で俺をジッと見つめてくる。まあ、見慣れた行動だがね。

さて、そんな客も含めざつと50人は入れるほどの大きさの酒場＞ステイツキーズくの店内をありていに説明すると、そうだな……海賊船をイメージした装飾が見受けられるつてところだらうか。そうそう、店主のオスワンさんは若い頃に海賊家業を営んでいたつて噂もある。そんなわけで自身の経営する店を海賊船風にしたんでは？ なんて言われていたりする。

まあ、それはそうと今日も常連客で大賑わいだ。まあ、田当ては、

この俺を含めた女性従業員だらうけどね。

「ふん、軟弱者が多いな、まったく……」

そんな愚痴をつぶやく同僚のシルメリスと田が合つ。酒場へステイツキーズくの従業員の中じや最年長者のが27歳。美人なんだが力タブツで思考も古臭いという難儀な性格の人物だ。でも、“お姉様”と他の女性従業員たちから呼ばれ慕われている。俺を除いてな！「おや、ルーナ。今頃お目覚め？ 今日は昼間から客がぞろぞろとやつて来て忙しいんだ。早いとこ手伝つてほしい」「へいへい、了解……つと、確かに今日は昼間から客足が多いなにかあつたのかい？」

酒場つて店は、本来なら口が落ちた頃から賑わつてくる店だろつて感じなんだが、今日は昼間から客足が激しい。いつもなら昼間にやつて来る客はほんの数人である。だけど、今日は違うな……ざつと20数人の客でわいわいがやがやと賑わつている。

「うむ、どうやらアールマティ陛下がなにかしらの公布を出したらしい。それで冒険者共が昼間から挙つてやつて来ているようだ」シルメリスは腕組みをしながら、今日に限つて真昼間からぞろぞろとやつて来る客たち 冒険者たちを順に見つめる。

「ふん、アールマティ陛下がなにかしらの公布ねえ……。あの御方は根つからのトラブルメーカーつて噂らしいから、きっと厄介な公布だらうねえ」

はは、ん、なるほどね。そーゆー理由があつたのか。

「ふふ、どんな公布なんだろうね。気になるねえ……」

どうも気になる話題、気になる話を耳にすると、俺は口許を舐め回す癖があるようだ。

まあ、それはさておき……出入り口の近くの壁にかけられた掲示板のところへと俺は向かつ。そこには、オルゴニア帝国領土内の様々な情報が記された紙が画鋲で貼りつけてあるのだ！

「なうにか情報あるかなあ……」

第1話「やる気のない勇者」その3

第1話「やる気のない勇者」その3

ありていに言うぞ！ ブルーノワール大陸の東方、そこは人跡未踏の地だ！ 分かるか？ 人の介入を拒む魔境だ、魔境！ 今のご時勢であつても未だにいるんだぞ、人食い人種とかくそみそに野蛮な原住民が！ だけど、気の遠くなるような大昔に、そんなブルーノワール大陸東方には、そうだな……想像を絶するようなトンでもなく発達した先史文明が栄えていたらしい。

ま、そーゆーわけで件の先史文明の遺跡を見つけ出して一攫千金を得よう、なんて企んでいる連中の多くがクイッサムの町を拠点として利用している。

ついでクイッサムの町以降、ブルーノワール大陸東方に大人数が何日も宿泊できるよう大型の宿泊施設などが軒を連ねるような大きな町は存在しない。せいぜい村人2、30人程度の寒村がいくつかあるのみだろうか……。

しかもよそ者にはくそみそに冷たいって話もよく聞くしな。ついでにだが、火薬製造技術の発展とともに銃火器が民間人の間にも徐々に普及しつつあるここ最近の世の中において未だに人肉を食らうような蛮族もいるようだ。迂闊に連中の住処に足を踏み入れればその日の食料にされかねないつづうわけだ

まあ、それはともかく。

「ありていに言うとだ……ブルーノワール大陸東方は人跡未踏の魔境がどこかに眠っている先史文明の遺跡＆財宝を発見した者には身分に問わず騎士の称号と多額の賞金を与えるって感じかな？」

と説明するシルメリスに対し、俺はムツ眉をひそめる。

「盗賊風情が騎士の称号を得る、とかそんな可能性もあるな……」

おいおい、盗賊家業を営んでいるような連中に騎士の称号を与えてしまつていいのかよつて展開も否めないな。そう考えると俺は複雑な気分となる。

「盗賊風情が騎士の称号を得てみる……代々騎士の家柄に育つた者にとつては屈辱的なものだぞ！ これだけはなんとか阻止せねば！」

シルメリスがガツと思い切り床に右足を叩きつける。

「あ……確かにシル姉えは落ちぶれたとはいえ、あの有名なアンザース家の傍系に当たる由緒正しき生まれなんだつけ？」

「う、落ちぶれたつて言つたな！ いつか、この私が、再興してみせるんだ！」

「ほう、豪氣だねえ」

やれやれ、意気込むのはいいが、それを本気で成し遂げられるのかな？ と俺は正直笑いたくなつたが、とりあえず冷静な態度だけは崩さないよう頑張つてみるが……はう、どうやら無理っぽい。

さて、シルメリスはオルゴニア帝国領土内でもつとも有名、いや、ブルーノワール大陸でもつとも有名な3大貴族のひとつであるアンザース家の傍系に当たるウォルフダート家の出身者である。

とはい、それも過去の話。今じゃウォルフダート家はすっかりと落ちぶれており、平民と同じような質素な生活を余儀なくされているようだ。んで、シルメリスは実家であるウォルフダート家の過去の栄光を取り戻そうと企んではいるようだ。

ま、部外者である俺にとつてはどうでもいい話だけどな。

「む、なにがおかしい……」

「いや、あの、その……と、とにかく頑張れや！」

他人がどうあれ、この俺には関係ない。そんなわけで無視だ、無視……つと、そう決め込もうとした時であつた。

「そういや、あの勇者様も件の公布を聞きつけて参加を決めたつて話だぜ！」

「あの勇者様！？ おお、あの急にその行方が分からなくなつちまつたつて噂のルースつて野郎のことかい？」

「おひおひ、その通りだぜ！　んで、さつさつひの町へ出張つてき
てるひしー」

「ほほほ、勇者とは思へん最悪な野郎だつて噂だが侮るひとはでき
んな！　よし、わかつてこの町を出でつけ！」

などと語り合ひ冒険者共の話に俺は聞き耳を立てる。

（おこおこ、勇者ルースつてのは、この俺のこじぢやないかああ
！　は、待てよ、偽者がいるつてこいつのか？）

俺の偽者がいるんだろうか？　とにかく、俺の怒りの炎が燃え
上がつたことはほんまでもない！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5303b/>

とある冒険者の日記 勇者ルースの自堕落冒険譚

2010年10月14日13時29分発行